

企画 [集えば縁ジョイ] 鹿児島大学少林寺拳法部／少人数で精進、伝統引き継ぐ

2000.10.30 夕刊

「せやーっ」「おー」。夕暮れ迫る、鹿児島大学少林寺拳法部の道場に気合が響く。二人で一組になり、突き、けりなどを磨くのが、“組み手主体”という少林寺拳法の基本。「相手を固める技の柔法が決まったときがおもしろい」と大城亜美さん（20）。激しい動きと、お互いに技を掛けて試行錯誤する笑い声が交錯する。

部員のほとんどが一年生。黒帯を締める大阪出身の辰巳茂樹さん（19）は、高校から始めた。鹿大でも門をたたいたが、「二、三年生がいなくてびっくり。後輩たちとこの道場で、練習できるようになりたい」。初段の吉留曜子さん（19）は、「黒帯が似合うような拳士を目指します」。合気道など武道の心得がある杉野文哉さん（20）は、「技やそのほかの教えも自分にあってます」と精進する。

前身は少林寺流空手道。すでに鹿大には空手道部があり、大会に出場できないなどの理由で、少林寺拳法部として一九六八（昭和四十三）年に再スタート。昭和五十年代初期は、九州インカレの乱取り（組み手）で優勝するなど隆盛を極め、部員も四、五十人ほどいた。しかし徐々に少なくなり、現在、実質は七、八人といったところだ。

主将を務める吉田正芳さん（23）は今年三月に卒業したが、部の行く末を案じて鹿児島に残った。「少林寺拳法を教えてくれた後藤正人監督や先輩に恩返しがしたかった」。部員確保に奔走、運営が軌道に乗るまでは、と頑張ってきた。しかし、十一月末には、故郷の兵庫に帰る。「後ろ髪を引かれますが自分の人生もありますから」。吉田さんの思いは、後輩たちが継いでくれるはずだ。

企画 [あの瞬間—私のスポーツ日誌] 少林寺拳法部／松浦茂光さん

1999.12.20 夕刊 (全 480 字)

写真は鹿児島大学少林寺拳法部二年生の時、夏にあった”黒帯合宿”での一コマです。厳しくて苦しいのが合宿、と相場は決まっていたましたが、黒帯合宿は初段に上がる二年生だけで自由にやれる楽しいものでした。

愛知県出身。もともと格闘技に興味があり、学生寮で拳法部の先輩と同室だったこともあり始めました。練習は厳しくて少々のことでは休めません。入部三週間で脚を疲労骨折しました。

治ったと思ったら約40キロの桜島一周のマラソンに出場。なんとかゴールするころにはすでに閉会式。先輩に怒鳴られる、とびくびくしていましたが、「よく頑張った」と褒められびっくり。この時ばかりは「いい先輩たちだ」と思いました。

振り返れば、半ば強制的に鍛えられたおかげで肉体、精神とも強くなったと思います。しかし、もっと科学的にやる方法があったはず。卒業のころ同期は半分に減っていました。気合、根性だけでは限界があります。

今は愛知五条支部長で五段、四十人を教えています。自分を主張するにはいろいろな自信が必要。少林寺を通して自信のある人を育てていきたいです。

(富士通勤務、愛知県海部郡甚目寺町)

企画 [あの瞬間一私のスポーツ日誌] 鹿児島大学少林寺拳法部／野元尚幸さん（37）

1999.08.30 夕刊（全462字）

鹿児島大学入学と同時に少林寺拳法を始めました。中学までは剣道。高校で部活をしなかったのが、大学では何かやろうと思っていましたが、少林寺は「あそこだけはやめておけ」と悪評の高かったところでした。

練習と上下関係が厳しいというのがその理由。私は、「極端なのがいい」と考えていたし、見てみると面白そうだった。でも、見学者がいるときは、わざと軽めの内容にしていたんです。

本格的な練習になるとさすがにきつかった。精神的にまいって胃を壊し、もどすこともありました。五時からの部活に備えて昼間は授業をさぼり、友人のところで休むようになりました。

おかげで留年。でも、やめようとは一度も思いませんでした。練習後、同僚の部屋に集まり、先輩の悪口やバイクの話で夜を明かしたのが楽しかった。先輩たちは練習では怖かったけど、人間的に魅力的な人も多く、素晴らしい部活だったと思っています。

写真は一年の春休みに屋久島であった合宿。尾之間から宮之浦までを完走しました。走るのは苦手だったけど、部活で得意になりました。

（鹿児島市小野二丁目、公務員）消防士？鹿児島市